

遊具と安全



1. 疫学

データベースとしての本邦の疫学報告はない。
国民生活センターの報告(1518件、2009-2015)によると¹⁾、
事故の原因となりやすい遊具は滑り台(32%)が最多で、
ブランコ、鉄棒、ジャングルジムなどが次ぐ。
公園・広場(62%)が最も多く、次いで幼稚園や学校、
その他レジャー施設や店舗でも発生する。
身体運動が活発になる5-6歳をピークに、6歳以下が7割を占め、
学童期以降は徐々に減少する。
転帰については、全体の3割が3週間以上の入院を要していた。



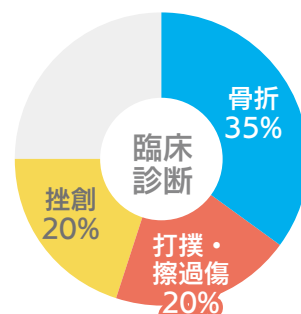
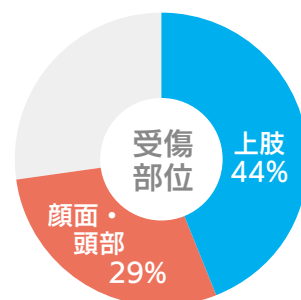
滑り台が最多
(32%)



ブランコ、鉄棒、
ジャングルジムなどが次ぐ

2. 病態

米国のサーベイランス報告(約213万件、1996-2005)によると²⁾、
受傷機転では墜落・転落(75%)が最多である。
受傷部位では上肢(44%)、顔面・頭部(29%)、
臨床診断では骨折(35%)、打撲・擦過傷(20%)、挫創(20%)が多い。
手すりや防護柵がない、周囲に衝撃吸収マットがない、
1.5M以上の高さなどがリスクとされる³⁾。
また、衣服や所持品の一部(紐やフード、水筒やカバン)が遊具に引っかかる、
あるいは遊具の隙間に直接首が挟まるなどの
「窒息・縊頸」による死亡事故にも注意が必要である。



3. 応急処置

頭部打撲時は安静に寝かせ、意識や手足の動きを確認する。
打撲・腫脹部位は氷嚢などで冷却、上下肢の骨折を疑う場合は副え木などで固定する。
創傷があれば水道水で洗浄し、出血部位は清潔なタオルなどで圧迫する。

4. 予防・啓発

- 遊具の対象年齢・使用方法を確認し、6歳以下の幼児には保護者が付き添う。
- 小児の衣服や所持品に注意する(首回りのひっかかりやすいものを避ける)。
- 雨天時は滑りやすく、夏場は遊具の温度上昇が起こりやすいので天候にも注意する。
- 手すりや防護柵がない、周囲に衝撃吸収マットがない遊具は使用しない。
- 遊具の不具合や破損、繰り返す事故があったら、利用を控え、管理者に報告する。
- 管理者は、事故調査をもとに、安全で楽しい遊具のデザイン・対策・管理を検討する。